

「イスラームとハラール」講演会報告

イスラーム研究所客員教授 有見次郎

平成26年9月5日(金)に長野市の「ホテル国際21」において、(社)長野県経営者協会主催、(株)八十二銀行後援による「イスラームとハラール」のテーマで講演を行った報告である。

長野県農政部農産物マーケティング室によれば、長寿日本一の恵み、おいしい信州ふーど(風土)との紹介が小生の講演後行われた。豊かな農産物とりわけ果実、野菜、肉、乳製品、魚、郷土食、加工品などについての説明であった。

さて、14時から2時間の講演内容については、以下の通りである。
シャリーア(イスラーム法)におけるハラール(HALAL)合法について

イスラームの信仰体系を理解してもらうため、現世と来世、最後の審判について説明。シャリーアにおいては神が立法者であるという基本事項、法の仕組みからはじめ、信徒にとっては現世の生活の生き様が来世の位階を決定することになること。したがって信徒は、ハラール(合法)とされる事物をいかに選択していくのか問われているのである。

さらにシャリーアの法源となっている神の啓示(クルアーン)と預言者ムハンマドのスナ(慣行)についての概論について触れた。具体的例証として、以下の明文を紹介した。

1-ハラールとハラーム(禁忌)について一次法源クルアーンの法規範から

「わたしたちに啓示されたものには、食べたいのに食べることを禁じられたものはない。只死肉、流れ出る血、豚肉—それは不浄である—とアッラー以外の名が唱えられたものは除かれる。…」【クルアーン家畜章(第6章)145節】

「アッラーから授かった糧を食べかつ飲みなさい。」【雌牛章(第2章)60節】

これらの明文から信徒は、以下のような基準をもとに各自が食に関するハラールの選択を行っている。

(1) 食べ物の安全と安心について

- ・実害がない安全食品、または滋養に優れている食品であっても、ハラール性が確保されなければ非合法となる。
- ・同様に、食べられる物でも、食べ物とみなされないことがある。

(2) 安心できる食べ物を得ることについて

- ・陸上動物：食肉を得るためには家畜のイスラーム法に従った方法、ザバハ(屠畜)を行う。使用するナイフを鋭利にし、屠畜される動物が苦しまぬよう配慮する
- ・海の動物(魚介・貝類など)：「海で漁撈し、また獲物を食べることは、あなた方にも旅人にも許されている。…」【食卓章(第5章)96節】⇒海の動物は死んでいても食してよい

備考：食文化の多様性(フグなど毒を除去して食べる文化、昆虫食の文化など)

(3) ハラールは日常生活上の安全・安心基準

原料の調達入手から調理、保管、輸送、製造、管理、サービス

などあらゆる面においてハラール性の確保が求められる。

調味料、添加物なども同様のハラール性が求められている。イスラーム圏以外の各国におけるハラール対応については一応ではなく、また個人の選択に委ねられる。シャリーアの法適用を巡り、日本版のハラール対応基準はできるのか。

2-スナ(預言者ムハンマドの慣行)クルアーンに次ぐ法律的根拠が具体的な信徒の行動基準を提示していると共にこれらを遵守すべきであるとされていること。

日本でもますますムスリムとの交流が盛んになるとの視点から、信徒の飲食の基準としての預言者のそれに関するスナから若干の説明を行った。

「ナツメヤシの実を7個食したものは、朝起きてから夕刻になるまで、毒に害されることはない」(ハディースより)

(匂いの強い食べ物について)

礼拝所(モスク)に赴く時はニンニク、玉ネギ、ニラなど他人に不快感を与える食べ物口にすることは禁じられている。

「アッラーのみ使いは、食べ物や運ばれてくると全部はお食べにならず、一部を残されてわたしに下さった…それはニンニクが付いていたからである。そこでみ使いに『それはハラームですか?』とお尋ねした。すると『いや、そうではないが、私はその匂いが嫌いだからである。』と申された。』(ハディースより)

(飲み物について)

「『あなた方はあらゆる種類の飲み物を飲んで良い。ただし、酔うものはいかなるものも飲んでではならぬ』と申された。』(ハディースより)

3-参加聴講者は40人を超えその中には製造業者以外の参加者もいたため、もてなしに関する紹介を行った。(飲食に関する信徒のマナー)

- (1) 食事の前後に手洗いをすること
- (2) アッラーの名(ビスマッラー)を唱えて食事を始める
- (3) 飲食後にはアッラーを讃美する(アルハムドリッラー)

4-その他

サービス業種の場合等に関して日常業務上の事柄については、設備、仮の礼拝スペースや店内、室内の備品などについても合法となるか否かに関しての気配りや、気付いた事柄を含め業務日誌にまとめることなどにより士気を高めてもらうよう指摘した。とりわけ担当者をはじめ社内では、ハラールへの対応に積極的に向き合うこと、そのために本講演で指摘したようにイスラームの基本事項を理解した上で、ムスリムへの良き理解者としてのもてなし、気遣い、心構えを忘れないようにと述べて講演を結んだ。

講演後の感想について、聴衆者の中の3分の1から関連な質問があった。出席者は、すでにハラールへの対応を行っている企業から、今後イスラームへの対応に取り組むための参加者まで様々であった。



講演する有見客員教授

イスラームの法と宗教 (2)

イスラーム研究所長 森 伸 生

(前号より)

神学が発生する背景

(1) 信仰の問題

神学が発生は分派の発生と関係する。それは各派で信仰の問題が取り上げられるようになったからである。ウマイヤ朝時代(661～751年)に入り、ハーリジー派やシーア派などが出てきて信仰についていろいろな考えが生じてきた。ハーリジー派が最初に出てきた一派で、次にシーア派が出て、最後にスンナ派が登場することになる。

1) ハワーリジュ派の主張

ハワーリジュ派の発生はスフィーン(657年)に起因する。アリー(～661年)が第四代カリフに就任したとき、シリア地方の総督であったムアーウィア(～680年)がそれを認めず反旗を翻した。アリーはユーフラテス川上流のスフィーンの地でムアーウィア軍と対峙するが、ムアーウィアの提案によりアリーは調停を受け入れ闘いを終わらせようとした。

だが、アリー派の一部がその調停に反対した。彼らはアリーを正当な後継者とし、ムアーウィアを謀反者と理解し、正義があるアリー派に荷担したのであった。だが、ムアーウィアと調停をしたことによりアリーもまた悪に陥ってしまった、とアリーを非難してアリー派から出て行った。出て行く者をアラビア語でハワーリジュといい、彼らはハワーリジュ派と呼ばれるようになった。単数形でハーリジー派とも呼ばれる。

ハワーリジュ派の主張は「信仰は行為であり、大罪を犯した者は不信者である」という極論である。ハーリジー派はアリーがムアーウィアと調停したことで大罪を犯したと見なし、死に値するといって彼を暗殺した。

一般信徒に対しても同じ態度で挑んでいった。礼拝を怠ったり、ましてや姦通などしたりした者はイスラーム教徒ではないと主張した。自分たちの考え方に同意する者がイスラーム教徒で、同意しない者はイスラーム教徒ではないとした。

2) ムルジウ派(判断を延期する者)の主張

ハワーリジュ派の神学的な極端な主張に対抗するように、ムルジウ派(判断を延期する者)が出てきた。ムルジウ派は「罪によって信仰を失うことはなく、罪を犯した者の信仰は審判の日に神によって判断される」と主張した。しかし、ムルジウ派も徐々に極論に走り、行為の必要性を否定するようになった。たとえば、「信仰告白をすれば、たとえ罪を犯しても地獄に落ちることはない。」とか「信仰告白をすれば、たとえ罪を犯しても地獄に落ちることはない」などとハワーリジュ派とは逆の方向で極論に進んでいった。

3) スンナ派の「信仰」とは

最後に出てきたのがスンナ派である。スンナ派は「スンナとジャマア」と表現される。その意味は「ムハンマドの慣行(スンナ)と正統な共同体(ジャマア)を護持する人々の集団」となる。スンナ派の名称はイスラーム登場当初から存在したと思われがちであるが、実際はさまざま分派や思想集団が出てきたことにより、それらに対抗するためにイスラーム教義などを自己形成した結果、明確な自意識が出てきたといえる。

他派への反駁として著された書にバーキッラニー(～1013年)の『反駁準備の書』がある。スンナ派は信仰を「神についての一定の教理を信じ、神の命令を知り、それを実践する義務があると心から信じる」と言い、つまり「行為は信仰の表現である」と主張した。これがスンナ派の基本的な考えである。スンナ派の前に出てきたハワーリジュ派もムルジウ派もその主張は極論であったが、スンナ派はその中間をいった。

(2) 自由意志と定命

クルアーンの中に記されている人間の自由意志と定命についても神学が発生した背景の一つである。クルアーンにはすべてのことがアッラーによって定められているとしている一方で、人間には自由意志があるとも言っている。この解釈をどうするかで多くの思想的な潮流が形成された。

1) ジャブル派

そこで現れたのがジャブル派である。ジャブルは強制という意であり、神によって人間に行為が強制されることを意味している。ジャブル派は神の定命を強調して、人間の自由意志を否定している。人間の行為の責任は全て神にあり、人間には行為の責任はないと主張している。

2) カダル派

当然、ジャブル派に対立する派が出てくるが、それがカダル派である。カダル派は「人間の手に運命がある」と主張して、自由意志を強調し、「人間は自己の行為の創造者である」と言っている。ここでまた問題が出てくることになる。それは人間が行為の創造者としたら、神以外に創造者がいることになるので、創造者が複数存在するという矛盾した状況に陥ることになる。

3) スンナ派

スンナ派はジャブル派でもカダル派でもなく、この場合も折衷的であり、人間の自由意志と神の定命を総合的に考えている。それが後に出てくるアシュアリー派の「運命獲得論」につながるわけである。

(3) 解釈学上の問題

神学が必要になった背景として、次に解釈学上の問題がある。クルアーンやハディースの中で表現されている神の属性をどう解釈したらよいのか、二通りの解釈の仕方が出てきた。

一つは字義的解釈であり、クルアーンの章句を字義通りに解釈することを主張する潮流である。しかし、クルアーンの中に書かれている通りに理解したならば、神を人間と同じような形で理解してしまう危険性があり、神を有限化、人間化することになる。

そこで出てきた考えが比喩的解釈である。神に手がある、神が座っているという人間的な表現を比喩として捉える。擬人的表現をすべて比喩として精神的に理解しようとした。しかし比喩的解釈を認めると、無限に多様な主観的解釈を行なうことになる。

(4) 他宗教との論争

1) イエス・キリストの神性について

イエス・キリストについて、イスラームではイエス・キリストの預言者性は認めるが神性は認めていない。イエス・キリストはあくまでも人間であり、一介の預言者であるとの立場である。彼の生

れながらの奇蹟性については認め、イスラーム神学の枠の中で定められている。

たとえば、イエス・キリストが父無くしてマリアから生まれてきたという処女懐胎を認めることはイスラームの信仰の一つである。神は土くれから人間を造ったのであるから、母胎の中に子を宿らせるのは容易なことだという論理である。そして、そこがイエス・キリストの純粋性だと言っている。

ムハンマドがクルアーンを得てクルアーンを話す時、ムハンマドは文盲という一つの純粋性を持続している。つまり、文字を知らないムハンマドが神の言葉としての奇蹟を得た。同じように、イエスも、生まれそのものを奇蹟として、そこに純粋性を見るわけである。作為がまったく加わってないということが純粋性である。

2) 「聖書」に対する立場の相違による論争

聖書に対する立場の相違についても論争が生じている。イスラームは旧約聖書、新約聖書についてもモーゼとイエス・キリストに下された啓示は信じているとの立場である。

しかし、現在目にする両聖書がモーゼとイエス・キリストに下った啓示を改竄されることなく継承しているかといったら、それはわからないので、イスラーム側はそのことについてノーコメントという立場をとっている。

もしかしたら、一部は神の啓示が継承されているとも言えるので、聖書すべてを否定するわけにいかない。かといって、それすべてを間違いなく神の啓示として受け入れるわけにもいけないので、ノーコメントという立場である。

それについて、預言者ムハンマドは信徒たちに「あなた方は啓典の民の言葉を本当だとも嘘だともせず、ただ『我らはアッラーを信じ、我らに啓示されたものを信じる』と言いなさい」と命じたことが伝えられている。これが旧約・新約聖書に対するイスラームの態度である。

ヘレニズムの影響／カラム神学の展開過程

カラム神学にはヘレニズムの影響が強く見られる。830年、アッバース朝第七代カリフ・マームーン（在位813～33年）が、バグダードに知恵の館（バイトルヘクマ）を設立した。最初は医学や天文学などの実用的学問に関する文献の翻訳が中心であったが、やがて哲学関係、特にアリストテレスの重要な著作のアラビア語への翻訳が行なわれた。

カラム神学はこのような文化的環境の中でギリシャ哲学の影響を多く受け、生まれてきた。

カラム神学は伝統主義の立場から始まり、次いで擬人神観主義的ファンダメンタリストの考えに陥りそうになり、それを非難して現れたのが合理主義的な立場であるムウタズィラ派である。それは先ほど説明した比喩的表現で解釈する立場である。

比喩的表現に偏ってしまうと、神の属性をすべて否定する危険をともなうことになる。そこで、次に現れたのが折衷的な考え方である。それが中道派神学、アシュアリー派である。アシュアリー派はスンナ派における一つの神学として認められている。

(1) 伝統主義の立場

伝統主義は理性に対して啓示を絶対的に優先させる立場をとっている。アラビア語でビラーカイファと言、「様態のいかにを問わず」という意味であるが、これは伝統主義がクルアーンに記されている神の属性について考えるときの態度を言った言葉である。

例えば、クルアーンの一節「慈悲深きお方は玉座の上に座したま

う」(20章5節)について、マーリク学派の祖師、マーリク・イブン・アナスが尋ねられて、「座したまうという神の属性については知りうるが、その様態についてはわからない。だが、それを信じることは義務であり、それについて詮索することは異端である」と答えた。これが伝統主義の考え方である。

Whatは肯定して、Howは問題にしない。だが、伝統主義者の中には、クルアーンの表現をそのまま肯定し、それを文字通り解釈して、神は人間と同様に具体的に玉座に座しているとする擬人神観主義的ファンダメンタリストもいた。これは人間の性であり、座しているというだけで思考を停止することは困難であり、神の擬人化に走りがちになる。

(2) ムウタズィラ派：アッバース朝マームーン時代の公式神学

1) ムウタズィラ派の開祖ワースィル・イブン・アター（699～748年）

ムウタズィラとは身を引くという意味であり、ワースィルが師ハサン・バスリー（642?～728年）の教説から身を引いたのが語源といわれている。ワースィルは宗教的に「罪を犯した人」は「信仰者」でも「不信仰者」でもない中間の「不義者」（ファシク）であると主張した。

この主張は師に受け入れられず、彼は「身を引いて」（イウタザラ）出て行った。そこから、彼の一派は「身を引く者」（ムウタズィラ）と呼ばれるようになった。

2) ムウタズィラ派の主張

神学的に見ると、ムウタズィラ派は神の属性を否定している。例えば「玉座に座す」についても、そういった属性はなく、慈悲を与えるという意味で解釈すべきだとした。「来世において神を見る」についても、主のご褒美を仰ぎ見ることで、「心で神を知る」ことだと解釈している。つまり、神を直接見ることはあり得ないとの主張である。

このように神の属性を比喩的な表現と解釈し、すべての属性を否定した。神の正義についても、神が悪を創造することはなく、人間に行動を創造する力を授けているので、人間が悪を行なったならば、その責任は人間にあると主張した。

ムウタズィラ派はもう一つ重要な主張を行なった。それは「クルアーン被造物」説である。アッバース朝初期（827～48年）にこの説が時のカリフ・マームーンに認められ御用学派となった。

しかしムウタズィラ派の教説に従えば、被造物はいつかは壊れるものであるから、クルアーンもいつか無くなることになり、クルアーンは永遠の奇跡であるアッラーの言葉であるとのイスラームの教義に反するとの、反論を受けることになった。

この「クルアーン被造物」説を徹底的に否定した学者が先述したハンバル学派の創始者アフマド・イブン・ハンバルである。結果的に、ムウタズィラ派は「クルアーン被造物」説が受け入れられず衰退していった。

(3) アシュアリー派：アシュアリー派はスンナ派の基本的な考え

先に説明した通り、最後に出てくる神学の一派はアシュアリー派である。開祖のアシュアリー（873～935年）の信条はクルアーンとハディースの教えが基本であり、理屈で説明できるものは説明するけれども、説明不可能なものについては人間の限界を素直に認めて、言われていることをそのまま受け入れることである。

だから、クルアーンの中でも、預言者が言ったことでも、人間の理性で理解できることは理解して、理解を超えるものはそのまま受

け入れる。それが中道派のアシュアリー派である。

神の属性についても、属性は神そのものではないが神とは別のものでもないとする。一人の人間がいて、手はその人間の一部であるけれども、その手は人間全体を表しているわけではない。そういうような捉え方である。ゆえに、神の属性について伝統派がとった「様態のいかにを問わず」の態度も受け継いでいる。その先を問うことは人間の限界と認めている。

この説明は、「神が玉座に座っている」をそのまま受け入れ、「いかに」は問わないということで、実存的な解釈を施している。つまり実存的な解釈が一番本質につながっている。20世紀の実存主義では実存が本質に先行するという立場をとったため、本質と実存は対立概念にある。しかし、この説明には実存の形をとった本質が顕現されていると言える。

また先述の「罪を犯した人」についても、たとえば礼拝を行わなかった者について、礼拝の義務性は認識しているがさぼった者はまだイスラーム教徒のうちであり、礼拝を否定して礼拝をしなかった人は不信者と規定している。中道的な見解であり、それはスンナ派の見解となっている。

そして定命と人間の自由ということに関して、与えられた運命つまり定命というものが存在すると同時に人間が自由な形で物事を決めていく「運命獲得論」を唱えた。つまり、アッラーが定めていることを結果として人間は獲得し知りえるということである。

後にガザーリーもアシュアリー派に同意している。だが、獲得論は一つひとつ獲得する行為を人間が選ぶということになるから、その時点で人間が創造者になることになるので創造者が二者出てくることになることが問題であると指摘されるが、ガザーリーはそれを人間は神の操り人形として動いているだけにすぎないと考えた。

ただし、一般信徒における定命の受け入れ方には限界があり、次のようなハディース（預言者言行録）が伝えられている。

信徒から「天国の住人と地獄の住人は前もってはっきりと区別されているのですか？」と預言者が尋ねられて、そこで彼が「そうです」と答え、「それならば行為者は何のために行動すればよいのですか？」と尋ねられた。すると、預言者は「一生懸命行いなさい。なぜならばそのために創造されたことに対しては誰でも容易だと感じるものだ」と答えている。¹

キリスト教プロテスタント改革者のカルバン（1505～64年）も、運命が決められているのだったら人間は運命を知ることはできないのだから、予定説を忘れるために一生懸命働くだけだと説いている。定命の受け止め方では同じ立場といえる。

(4) 理性を超えた智慧

ムハンマドへのアッラーの啓示、預言者に起こる奇跡など、信仰の対象を考えるとときには理性を超える存在の有効性が強調される。たとえばマリアの処女懐胎も同様である。それは人間の意志では起こせない事象であり、一種の奇蹟であって、奇蹟というのは科学的あるいは理性的には説明できない。

処女懐胎を自然科学の法則に反するではないかというのは、信仰の側からすれば無意味である。そういうこともありうるという、いわば理性を超えた智慧、超理性として理解すべき現象である。

17世紀以降、理性はすべて定量的に表現できるとの考えが主流となった。しかし、量で表現できないものもある。量で表現できるというのは尺度があって、尺度にはまるものは形がある。だが、感

情などは量的には表現できない。

ガリレオは自然の性質には二つあるとして、第一の性質は定量的なもので、第二の性質は定量的でない定性的なものであると言った。17世紀以降、定性的なものを無視して、定量的なものだけしか認めなくなった。ガリレオ自身、自分は定量的なものしか興味を持たないと言っている。

数学的（定量的）に表現できるものしか真理として認めない。だが、定量的に表現できない様々な智慧があり、それは超理性とよぶことができる。宗教というのは「理性を超えた智慧」と捉えるべきである。

(5) 神学と神秘主義の関係

神学はイスラームの信仰の枠を決めるもので、その枠の内側にいる限りはイスラーム教徒となる。しかし神学は枠を定めるだけであり、信仰を深めていくことはできない。そこで信仰を深めていくことができるのは、行を通しての神秘主義（スーフィズム）であると、神秘主義者（スーフィー）は主張している。

スーフィズム（神秘主義）の登場

(1) スーフィズムの起源—禁欲主義

スーフィーは神秘主義者、神秘家の意味であるが、語源はスーフである。スーフとはアラビア語で羊毛を指し、スーフィーはそれをまとった者という意味である。庵にこもって羊毛をまとめて修行に励んだ人をスーフィーと呼んだのが始まりで、それが徐々に神秘主義者を指すようになった。

(2) スーフィーの登場—9世紀頃（アッバース朝の黄金期）

法学的体系は整ってきっていたが、形による救いだと言いながら形骸化していった。神学にしても信仰の枠は決めたが、いかにして信仰を深めていくか、その方法はわからなくなってきた。

しかし預言者の時代から信仰を深めていく方法は実際に一つの形として存在していた。それは預言者の教え通りに生きていけば会得できたはずである。それが徐々に失われて社会的な現象として広がっていき、社会が宗教的内面を考えなくなった。そうした中でスーフィズムが登場した。スーフィズムは禁欲主義と密接な関係がある。禁欲的精神は預言者時代から存在していた。

それはイスラームの基本的な教えとして、質素な生活を奨励し、断食の義務が課されていることから理解される。しかし預言者をスーフィーの最初とはしない。預言者は行動的にも精神的にも調和のとれた生来の特質を持つ完全な存在であったからである。信徒の模範的人間であり、それは後のスーフィーにとっても同様である。

スーフィーは9世紀頃、預言者没後1世紀半から2世紀経って、アッバース朝の黄金期に登場してきた。非常に華やかな時代で、人々が贅沢な暮らしに流されている生活に反発して、スーフィーが出てきたと言われている。

もう一つの登場理由は形骸化した法学や神学への反発である。そして、信者共同体の分散化もその理由である。共同体の良さが分散化によって失われ、ムスリム同士の結びつきが弱くなった。ゆえに、神秘主義者らが神秘主義指導者のもとに集団を形成し、同胞意識を高めることを求めるようになった。

(3) スーフィズムとは

1) 真実在との合一によって安定が得られる方法としての行

スーフィズムとはスーフィズムの研究者たちの表現によると「目

¹ 日訳サヒーフムスリム第三巻p.575

に見えるモノの存在を絶対的なものと考えず、日常意識を超えたところに真実在が存在することを信じている。更にこの相対的存在が真実在と合一するという思想・体験²である。

スーフィズムは一つの考え方で、その考え方はそれを体験することによって初めて成立する。体験しない者にとっては、字面だけの理解になってしまうのは否めない。

2) 中世のスーフィーの説明：水の状態を使って説明

中世のスーフィーがモノの存在について水の状態を使って説明した方法がある。³スーフィーは水というのは「何か」がある一定の条件のもとでその形をとっているにすぎないと考え、目に見えるモノの存在を絶対的なものと考えない。ある時には水、ある時には水蒸気、氷となって現われるわけで、大本に「何か」がある。その「何か」が「日常意識を超えたところに存在する真実在」であるという。

それを水ではなくて今の我々の状態に置き換えて、人間もこの「何か」が変化して今ここに存在すると考える。つまり真実在が一定の条件下でたまたま「私」という形をとっているだけで、仮象的存在にすぎないかもしれない。

そういう甚だ心許ない状態に置かれている心理状態から逃れるには真実在と合一するしかなく、真実在との合一によって安定が得られる。スーフィーはそういう考え方をしている。そして、それをいかに体験していくかというのがスーフィーの修行である。

(4) スーフィーとウラマーの対立の原因

1) シャリーアを巡る双方の非難

スーフィーが神秘的体験によって得た知的体系は、シャリーアを遵守しているウラマーの知的体系と対立した。その対立には、シャリーアを巡る双方の非難がある。

ウラマーからすれば、スーフィーはシャリーアを軽視しているように見える。これには、スーフィーの側に自分はシャリーアを超えたところに存在するので、シャリーアを守る必要はないとして、シャリーアをまったく守らない人たちが出てきたという背景がある。

スーフィーは、ウラマーが礼拝や断食さえすればイスラーム教徒の範疇だと言い、その内面を問わないのは律法主義で形式主義であるとみなした。中身のない礼拝や断食をしてどうなる、何ら意味がないではないかとウラマーを非難した。

2) 両者側を代弁する「知識」の内容の対立

もう一つの対立は「知識」の内容である。ウラマーの知識はエルムといって、クルアーンの知識であり、預言者のスンナの知識である。誰でも学習によって習得できる形式的論理的なものである。それは神の啓示として絶対的な権威をもっている。

それに対して、スーフィーの知識はマアリファといって、全人格をもって神の唯一性を悟り知ることである。これは自らの体験によってしか知りえることはない。マアリファは「知ること」という意味で、インスピレーションによって得るものである。

そこで、スーフィーの中にはマアリファはエルムより優るものであると主張する者が出てきた。ウラマーがそれを認めたら、彼ら自身の権威が失墜してしまうことになるので、スーフィーの主張を完全に否定した。

3) スーフィーの多神信仰につながる行為

ウラマーは、奇蹟を行うスーフィーに祈願や誓願をする行為を聖

者崇拜だと非難し、さらにスーフィーのよく使う言葉「われは神である」、「われに栄光あれ」はアッラーを冒瀆するもので、多神につながるかと非難している。

ここで興味深いことは、「われは神である」というのは人間が限りなく自我を消滅して、その果てに働いている神の存在が顕になってきて、その神が人の口を通して語っているのであって、この「われ」は神的「われ」で、通常の「われ」ではない。

従って、その「われ」というのは最も徹底した自己卑下ということになる。つまり尊大から言っているのではない。「われは神である」という時は、自己が完全に消滅した状態にある。そのようにスーフィーは言っている。

ウラマーとスーフィーの間には以上のような対立が出てきた。

ウラマーとスーフィーの対立を克服したガザーリー

(1) ガザーリー (1058~1111年) の位相

ウラマーとスーフィーの対立を克服した人物がガザーリーである。ガザーリーはシャーフィー学派の法学者であり、神学者であり、哲学者である。神学者ガザーリーは正統神学を集大成して、ギリシャ哲学、アリストテレスの論理学を修得して、セルジューク朝の最高学府ニザーミーヤ学院の教授を務め、当時における最高の学者であった。

しかし、そのガザーリーが突如として教授職を投げ捨てて放浪の旅に出た。なぜ放浪の旅に出たのかについては、彼の著書『誤りから救うもの』(“al=Munqiz Min al=Dalal”、以下“al=Munqiz”と略記)にまとめられている。邦訳では中村廣治郎訳『誤りから救うもの』⁴と藤本勝次訳『誤りからの救い』⁵の二冊がある。

1) ガザーリーの修学時代

ガザーリーの名称は「ガザーリー」なのか、「ガッザーリー」なのかという問題があるが、当時どのように発音していたの、今となっては不明である。藤本勝次訳ではガッザーリーとなっているが、日本語では一般「ガザーリー」と呼ばれている。正式名は「アブー・ハーミド ムハンマド ビン ムハンマド アルガザーリー」である。

ガザーリーは1058年(ヒジュラ暦450年)、ベルシャ、ホラーサーンのトースの付近の小村ガゼラに生まれた。父親は羊毛商人である程度の財をなし、子どもに対して教育熱心だった。父親は生前、友人に自分が死んだ後にその財で子どもたちに教育を与えるよう頼んでいる。知的係累としては、父方の大おじが神学者であった。

ガザーリーは幼い頃、ホラーサーンで法学の基礎的な知識を修得し、青年期にカスピ海南岸のグルガンにいるアブー・ナスル・イスマーイーリーに師事した。イスマーイーリーとあるので、シーア派のイスマーイール派の人物だろうと思われる。

そして、1077年にニーシャープールのニザーミーヤ学院のイマーム・ハラマインに師事した。この人物は当時の最高の学者と知られていた。この学院はニーシャープールにある学院であるが、ニザーミーヤというのは同じ名前各地に設立されていた。

そのイマーム・ハラマインが1085年に死去し、その後、イスファハーンにある宮廷に呼ばれ、そこで学業に専念することになるが、そこで特にイスラーム哲学、アリストテレス哲学を修学した。

(次号に続く)

² 東長 靖『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会、1996年、p.53

³ 前掲書、p.45

⁴ ガザーリー、中村廣治郎訳「誤りから救うもの」筑摩書房、2003年

⁵ ガッザーリー、藤本勝次訳「誤りからの救い」『世界文学大系68 アラビア、ベルシア集』筑摩書房、1964年

ベトナムのムスリム事情 (5)：中南部ファンラン地区

イスラーム研究所科学委員会委員長 武藤 愛二

1) ベトナムのラマダン月の観測

ベトナムでは、6月28日(土)にラマダン月に入った。ベトナムは、以前からChau Doc (Pulau Ba村)、Tay Ninh、Binh Duong (Minh Hoa) 各地区で、新月の観測が行われていますが、今回は、27日(金)日没後の観測で、各地とも厚い雲に覆われて新月が確認できず、翌日の28日からのラマダン月入りと発表されました。

この3地区(地図参照)とも、ベトナムの南部でムスリム人口が多い所です。

各拠点ともに広い農地で、周りには視界を遮る建物もなく、新月観測に適しているため、ここでハーキム・ムフティーらが観測した情報が、携帯電話で、ホーチミンのムスリムコミュニティに連絡されてラマダン月始まりの諸行事が行われます。

ホーチミンのムスリム長老に話を聞くに、電話の発達する前は、ベトナムで多くのムスリムが住むChau Docでの新月観測情報が、バイク伝達で、ホーチミンに伝わっていた。当時、Chau Doc (ホーチミンの西南250キロ)をマグレブ後出発したバイクの伝達者が、ホーチミンの街に着いたのが翌日、夜が明けた9時過ぎで、伝達者到着後に、ラマダン月の礼拝をしたこともあった。

2) ファンランへのバス旅行

さて、今回は、ラマダンの始まる前に、ベトナム中南部のファンラン(Phan Rang)に出かけた。ファンラン地区は8世紀から11世紀にかけ、最盛時、中国とオリエント(中東)との交易で栄えたチャンパ王国が、15世紀後半、ベトナム族に敗退するまで、都の一つ

を構えていた場所である。無論、多くのチャンバ族は、王国の衰退と共に、海外(海南島經由中国、マレー半島、更には、フランス・米国等)に移住したり、ベトナム南部に移り、メコンデルタ、更には、カンボディアに移り住んでいった。

ファンラン市(Phan Rang)は、ホーチミンの北東300キロの海岸沿いに位置する。海岸は、風光明媚なリゾート地でもある。省の名前は、Ninh Thuanで、人口80万人程度の地区である。

ホーチミンの西のMien Dongの長距離バスの停車場を、朝7時半に出発し、ファンランに到着したのは、夕方4時半であった。

到着後、即バイクタクシーと交渉し、ファンラン地区のモスクを探しに、バイクの後ろに飛び乗った。ファンランから、ホーチミンに戻る形で、南に20キロ下ったところにPhuoc Nam村があり、この地帯に数百人のムスリムが住んでいるとの事であった。

言葉もわからないままのバス一人旅で、訪ねる人も、住所も持たないままの無謀な旅であったが、バイクタクシーの運転手に方角を



ホーチミン西の
長距離バスの停車場

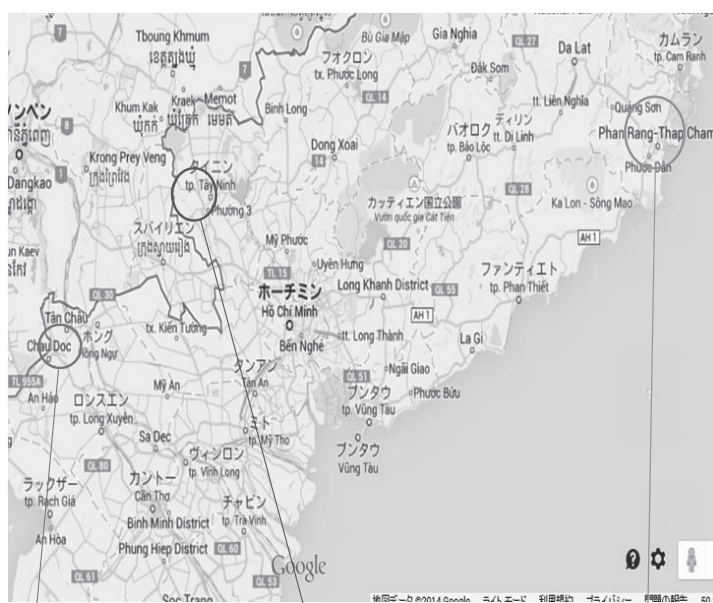


Phan Rang到着後、バイクタクシーの
後ろに飛び乗って一路、モスク探しに。



Chau Doc、Tay Ninh地区
(カンボディア国境)

カンボディアには、チャンバ族との血縁を持った多くのムスリムが住んでいる。



Tay Ninh地区(ここには
混淆教のカオダイ教の総
本山がある)

Phan Rang地区

▲ チャンパ王国の最盛時の勢力圏

旧チャンパ王国の南部Phan Rang地区

指示し、走って行く途中、ヒツジの群れを目撃、ラマダン明けに供されるヒツジの群れと判断（ベトナム国内では、普通、羊の群れを見ない）し、ムスリムコミュニティが近いと知った。

暫くし、先方にモスクの尖塔を見つけることが、出来た。残念ながらモスクは閉じられていて、一時間ほど滞在、辺りを訪ねたが、言葉の壁もあり、直接ムスリムからの聞き込みを得ることが出来なかった。

3) チャンパ・ムスリムとチャンパ・バニに付いて

今回は、時間をかけてファンラン地区を訪ね歩く予定である。

ファンラン地区には、チャンパ族（チャム語を話す人々で、チャム族とも言われる）のムスリムと、そのコミュニティから一線を、画しているチャンパ・バニと言われる人たちが生活している。ベトナムのムスリムたちは、チャンパ・バニの信奉する宗教を、異端としているが、チャンパ・バニたちは、「自分たちは、ムスリムである」と公言している。

一般的な解説書では、ベトナムのチャンパは、チャンパ王国の流れを組み、王国滅亡後も、海外に移住せずに、ベトナム国内に留まった人たちの子孫であり、ベトナム政府は、宗教政策上、行政的にチャンパ・バラモンと、非バラモンを総じて、チャンパ・バニと二つに分けて登録させたため、現在でもこの分類が、一般的となっている。

チャンパ・バラモンは、チャンパ王国で「国教」的扱いであったヒンズー教（20%程度）を信奉してきた人たちの末裔であるが、他方、行政的な定義のチャンパ・バニ（約80%）の中にも、チャンパ・バニと、イスラームに改宗したチャンパ・ムスリムとに分かれている。

チャンパ・ムスリムたちは、（王国滅亡後も）早い時代から、外の世界と接触を持ち、メコンデルタに移住したチャンパ達とも交

流・血族を保持していた人たちと言われている。メコンデルタに移住したチャンパ達は、マレー半島から移住してきたジャワ族とも血縁を持ち、チャンパ・コミュニティを維持する中で、イスラームの教義を教え伝え続けてきた人たちである。

他方、チャンパ・バニと言われている人たちは、外部との接触を避け続け、自分たちだけで、チャンパ王国時代からのイスラーム教を、口承で受け継いできたと言われているが、長い間に、教えは変節を受け、イスラーム教とはかけ離れてしまっている。チャンパ・バニは、司祭階級（ムンと呼ばれる）と一般人に分れ、一般人は、6信5行を行っていないと言われている。

チャンパ・バニの所有する「クルアーン」を見せて貰ったホーチミンのムスリムより、「(書物の) 記述には、クルアーンと違った章句がある」と話してくれた。

又、このチャンパ・バニは、「ムン」と呼ばれる長老が、儀式・礼拝を取り仕切り、人々から、「ザカート」と称しての「上納金」を得ているとのこと。又、「ムン」と呼ばれる長老が、巡礼帰国後、「カーナー（メッカとマディーナのこと）に行ってきた。アッラーから、直接話を聞くことが出来た」と、住民に説明をしていたとの話も、ホーチミンのムスリム社会では、揶揄的な情報として伝わってきている。

ホーチミンのムスリムコミュニティの間でも、チャンパ・バニとの友好的な会話を通じて、本来のイスラームへ改宗させていきたいとの動きもあり、次回ファンラン地区を訪問する際は、チャンパ・バニとの面談を試みる。

又、以前記したベトナム独自の新興宗教で、イスラーム教を取り入れたとしている混淆宗教カオダイ教の総本山は、Tay Ninhにあり、カンボディアとの国境地域で、ムスリム人口の比較的多いところである。



ベトナムには、水牛は多く見られるが、羊の群れは珍しい



Phan Rang のナアマ・モスク



アザーンの代わりに使用されている太鼓
拡声器の使用が禁止されていたとの説もある



ナアマ・モスク内の学習場（マドラッサ）

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL: http://www.sri.takushoku-u.ac.jp

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

平成26年10月20日発行 第44号
発行人 拓殖大学イスラーム研究所
編集人 イスラーム研究所客員教授
柏原 良英

正統四代カリフの時代－アブーバクル (21)

(前号より)

また、ある日、・・・

預言者を囲む会合でアブーバクルは預言者が次のように言っているのを聞いた。

「アッラーの道に善行を行なった者は、天国の諸門から招かれる。アッラーの下僕よ、礼拝を行なった者は礼拝の門から呼ばれる、聖戦を行なった者は聖戦の門から呼ばれる。断食を行なった者は水が溢れる門から呼ばれる。喜捨を行なった者は喜捨の門から呼ばれる。」

アブーバクルは言った。「私の父よりも、私の母よりも大切なお方であるアッラーの使徒様。天国の諸門から呼ばれる者には、何を必要としますか。天国の諸門すべてから呼ばれる者はいますか?。」

預言者は言った。「確かに。そなたがその一人となるであろう。」・・・

アブーバクルは家族や一族の者にアッラーの意にかなった事を行ない、無意味な事柄を避けるように注意し、来世を重視し、現世の虚飾に惑わされないように、促していた。アブーバクルから忠告を受けた様子を娘のアーイシャは次のように語っている。・・・

ある日、私が新しい服を着て、父親のところへ見せに行くと、「アーイシャよ、何を見せたいのかな。アッラーは決してそなたの姿を見ることはないよ。」とアブーバクルは彼女をたしなめた。

「なぜですか。お父様。」

「この世の飾りに満足している者は、その飾りを身から離すまで、主がその者を忌み嫌うことを、知らないのかな。」

それを聞いて、私は急いでその服を脱いで、貧しい人に寄付した。それを見ていたアブーバクルは笑みを浮かべながら言った。

「アーイシャよ、それによって、そなたはその償いをしたことになる。」

アブーバクルは現世の虚飾が彼にまとりつくことを恐れて時折その不安から涙することがあった。伝えによると・・・

ある日、アブーバクルが飲み物を持ってきてもらった時に、何か思い出したように突然泣きだした。傍にいた者達がアブーバクルに尋ねた。

「何を泣いているのですか?。」

アブーバクルは答えて次のように言った。

「私がアッラーの使徒様と一緒にいた時、彼が『私から離れよ』と言いながら、自分自身を何かから護っているのを見たことがある。彼の側には誰も見あたらなかったの、彼に尋ねてみた。」

「アッラーの使徒様。あなたは何を追い払っていたのですか。私の他には誰もいませんけど。」

「アブーバクルよ、この世が持てるもの全てを持って、私に近寄っ

てきたのだ。そこで、私はそれに向かって『私から離れよ。』と言った。するとそれは遠ざかりながら言うことに『アッラーにかけて、そなたはわしから自由になった。しかし、そなた以外の者はわしから自由になることはないであろう。』」アブーバクルが言葉を続けた。

「アッラーの使徒様のこの言葉を聞いているので、この世の虚飾が私に取り付いているのではないかと心配でならない。時折、その不安が私を泣かせるのである。」・・・

アブーバクルは人々よりも先んじて躊躇うことなくイスラームに入り、アッラーとアッラーの使徒に対する信仰から片時も離れることはなかった。

彼の口癖は「彼が述べたのであれば、それは真実である。」であり、それによりスティーク（信じて疑わない者）の敬称で知られるほどであった。

サウル洞窟で預言者と共に過ごし、聖遷で預言者に同伴した人物であった。アッラーの使徒を護り、すべての財産をアッラーの道のために費やし、多くの奴隷を解放した人物であった。

それでもなお、アブーバクルは現世の虚飾が彼に取り付くことを恐れ心を震わせるのであった。実にアブーバクルに現世での目的は存在しなかった。

(次号に続く)

研究会報告

【平成26年度第2回タフスィール公開研究会開催】

今年度第2回目のタフスィール（クルアーン解釈）公開研究会が、平成26年7月26日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は四戸彌弥同志社大学教授でクルアーン第12章ユースフ章19～40節を解説した。

محتويات العدد

- 1 . المحاضرة عن الإسلام والحلال
أستاذ زائر لمعهد دراسات الشريعة : أريمي جبرو
- 2 . مقالة عن الشريعة الإسلامية والدين
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
- 3 . مقالة عن المسلمين في فيتنام
مدير اللجنة الكيماوية : موتو أيجي
- 4 . مقالة : الخلفاء الراشدين (21)
- 5 . أخبار المعهد: الدورة الثانية لدراسات التفسير (سورة يوسف)